

2. 総合学習としてのクラス演劇

—『ヌチドタカラ』への取り組みから—

田中裕巳

はじめに

本校（中学校）では、学校祭にクラス演劇を実施するようになって10年ほど経つ。クラス演劇が実施されるようになってからは、幸か不幸か高校の担任ばかりであったが、この3年間、連続して中学校の学級担任をする機会を持った。私はいわゆる演劇教育には縁もゆかりもないし、日頃から演劇にさほど興味を持っているわけでもない。生徒、学生の時代も、役者として舞台に立った経験もほとんどない。従って、本稿は演劇にはズブの素人の教師が、演劇を通して生徒達との様に関わったか、その中での総合学習的な試みの一端を紹介しようとするものにすぎない。

中学の担任になるということは、本校ではクラス演劇の指導という、私にとっては不得手な重い課題を引き受けることになる。86年度、中3の担任としての初めてのクラス演劇は、生徒達が『人形館』を自主的に選択し、演出にも熱心な生徒がいて、ほとんど劇作りについては担任が学ばせてもらうというような状況であった。読み合わせの段階から立ち上げいこ、舞台げいこ、大道具製作など、さぼる生徒がいないように監視している程度の役回りであった。87年度は中1の担任となり、生徒の自主性に任しておくというわけには行かなくなった。社会科教師として、出来るだけ社会的な問題を考えさせるような脚本を捜した。齊藤隆介氏の『ペロだしチョンマ』をもとにした鈴木計広氏の脚本（注①）を選び生徒達に提示した。中学生として初めてのクラス演劇に取り組む生徒達にとって、出演者数も多く、農民一揆について歴史の学習ともつながり、さらに家族の愛情というものを考えさせる上でも、良い脚本であったと思う。たまたま後期の教育実習生として社会科の授業を持つことになった学生が、大学で演劇活動をしており、発声法から演技指導や大道具の作り方まで、自発的に生徒を大いに指導してくれたのもこの年であった。この事もあって、この年もまたクラス担任として、クラス演劇作りへの関わり方を、大いに学ばせてもらった。

そして88年度、再び中3の担任となつてからのクラス演劇には、沖縄戦をテーマとした『ヌチドタカラ』（注②）を担任として強く推した。初め生徒達は、彼ら



が中1で見た『人形館』を、今度は自分達がやりたくかなりこだわっていた。「二番煎じ」（本当は三度目ということになる）と私は決めつけ、「いままで演じられていない新しい脚本で行くべきだ」と衝突した。『ヌチドタカラ』の脚本に目を通していた女の子の大半は、「やってみよう」とすぐ担任の側に付いてくれたが、出演者数の少ない男子には最後まで不満があったようだ。

脚本選定の段階（6月）ではこのような問題があった。中1の段階から“荒れた学年”と言われ続けてきたこの学年も、先年度あたりからやや落ち着きを見せるようになり、リーダー的な核（とまではとても言えない。一昨年度の演出者は素晴らしい指導能力を発揮した！）も徐々に形成されつつあった。少なくとも「最高学年として、出来るだけ自分達の手で、例年の3年生に負けないような劇を作りたい」という意識を持つメンバーが少数はいると言う程度には成長していた。最初から最後まで、この「例年の3年生に負けないような劇を作りたい」という生徒達の意識を挑発しながら取り組んだこの年度のクラス演劇は、クラス担任としても、ようやく3年目にして、充実感を残す事の出来た取り組みであった。

1. なぜ『ヌチドタカラ』でなければならなかったか

教師にとって、特に社会科の教師にとっては、地理や歴史を教える場合、現地（現場）を見ておくことは、教材解釈の深さだけでなく、語り口にも影響してくる。

身銭を切って旅に出かけ、見聞を積み重ねておくことに越したことはない。

しかしながら、私にとって沖縄は遠かった。『ヒロシマ・ノート』に続いて、大江健三郎が『沖縄ノート』を書いたのは、1970年4月。佐藤・ニクソン会談で、安保堅持、72年沖縄返還が発表されてから5カ月後であった。『沖縄ノート』の終章“「本土」は実在しない”で、大江は次のように書いている。

「いま沖縄の現場で、『本土復帰』にいたるなしくずしの一体化のいちいちを見つめつつ、沖縄を限りない異議申し立ての場所として機能させつづけよう主張しているところの、戦後の沖縄がつくりだした新しい人間たちにとって、消極的な『本土』の単純なイメージは実在しない。いまにも島ぐるみかれらをのみこもうとする巨大な困難の渦巻のまえで、かれらこそは自由な、多様性のある想像力において、沖縄を、日本を、アジアを、そして世界を見る。すなわちかれらは、沖縄に開いている、血を流しつづける傷のような歴史の切り口を、その全体の展望において見る。僕はかれらの存在とかれらの眼の見えるところのものにむかって、自分の想像力をつねに働かせつづけることをねがい、それなしでは自分の、日本人とはなにか、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか、という問いかけ自体が、みにくく萎んでしまい、あわれに朽ちてしまうことを認める。」

大江のヒロシマとオキナワを結ぶ、核時代における人間のあり方への想像力に共鳴しつつも、自分自身で沖縄に行きたいという願望は煮詰まっていた。大江は「沖縄へ行くたびに、そこから僕を拒絶すべく吹きつけてくる圧力は、日まじに強くなると感じられる。この拒絶の圧力をかたちづくっているもの、それは歴史であり現在の状況、人間、事物であり、明日のすべてであるが、その圧力の焦点には、いくたびかの旅行で、僕がもっとも愛するようになった人々の、絶対的な優しさとかさなりあった、したたかな拒絶があるから、問題は困難なのだ。」(『沖縄体験』岩波書店“日本が沖縄に属する”P. 86)と書いているが、私が沖縄へ行くことを“拒絶”していたものは、単に旅費と日常的な忙しさに過ぎなかった。

1987年の夏休み、私は沖縄大学主催の「沖縄戦と基知問題を考える'87沖縄セミナー」に参加する機会を得た。1日目は沖縄大学で、3つの講演を聞いた。①このセミナーの事務局長を勤められた同大学宇井純教授の“沖縄の開発と公害”，②同大学学長新崎盛暉教授の“沖縄の基地問題”，③読谷村村長山内徳信氏の“読谷村の文化村づくり”の三つであった。それぞれに訴える力があつたが、特に山内村長の話では、米軍基地の中に「平和の森球場」を作るという発想のユニ

ークさと、完成までにいたる村をあげての闘いに感銘を覚えた。2日目はその「読谷村の戦跡・基地・文化めぐり」で、トリイ通信基地、象のオリなどの米軍基地・施設などに続いて、シムクガマとチビチリガマという2つのガマを見学した。この2つのガマについては、次のような資料をいただいた。

「チビチリガマ この洞窟には波平の住民が避難していたが、米軍上陸後の3日目に放火して、その煙で集団自決をとげた。141名中82名が絶命。壕内の警防団が竹槍で抵抗、このため米軍に反撃され、パニック状態に陥ったのが原因だった。対照的に1km離れたシムクガマでは、ハワイ帰りの男2名が米軍と交渉して全員無事に救出された。壕内には、避難民の生活用品や遺骨の破片が散乱して集団自決の地獄絵図をとどめている。」

チビチリガマの入口には、春に完成したばかりの「平和の像」(その年の秋、右翼の手で破壊された)が建立されていた。そしてガマの入口の、まだ陽光の差し込むあたりに「ヌチドタカラ」と筆で書かれた板が、地面に直接置かれていた。それを見ながら奥に進んで行くと、各自の懐中電灯に照らされて、茶碗や皿のかけら、びんの破片、眼鏡のレンズなどに混じって、まだまだ小さな人骨もあった。それほど深いガマではなかったが、奥のちょっとした広い空間のところ、全員懐中電灯を消して、1分間の黙祷を捧げた。

シムクガマは生還壕と呼ばれ、チビチリガマとは対照的に入口も大きく、奥行きも深かった。同行した読谷村の知花昌一氏は、さきのチビチリガマの「平和の像」建設メンバーの中心であったが、このシムクガマの入口で、「沖縄戦では集団自決ばかりが悲劇として、美談として語られてきたが、生き抜くことは何も恥ずかしいことではない。シムクガマの体験を通して、沖縄戦のもう一つの側面を明らかにして行かなければならない」と語った。この見聞と言葉が、後から考えてみると、脚本『ヌチドタカラ』に向かわせたように思う。(注③)

3日目は、那覇市を出て米須までひめゆり部隊(沖縄師範学校女子部・県立第一高女女子学徒隊)の足跡をたどるというコースで、琉球大学のそばの元指令部跡、南風原の陸軍病院壕跡、糸数高地、摩文仁の平和祈念公園、ひめゆりの塔などを訪れた。最後に寄ったのが白梅の塔であったが、これは県立第二高女の白梅部隊の慰霊塔である。ひめゆりの塔が観光コースになっているのに対して、こちらには訪れる人も少ないということであった。『ヌチドタカラ』の主人公4人は、この県立第二高女の生徒という設定であった。

那覇空港を離陸して、名古屋空港に到着するまで、私の頭を去来していたのは、岐阜出身の日比野勝弘と

いう人の事であった。沖縄県立平和祈念資料館の『平和への証言』にも収録されているが(注④)、ガマの中での傷病兵としての死線をさまよった体験を綴っておられる。氏は毎年夏、沖縄を訪れ、同じガマで死んで行った同僚達の霊を弔っているという。私の場合、沖縄をいつ再訪できるかは分からないが、チビチリガマの真の暗闇の中での黙禱、平和への誓いをあらゆる場で、語り続けるくらいの事はできるし、やらねばならないと考えていた。

2. 脚本選定から本読みまで

“はじめに”ですでに触れたように、担任推薦の脚本『ヌチドタカラ』を生徒達はすんなり受け入れてくれた訳ではなかった。特に出番の少なくなりそうな男子の強力な反対論が最後までであった。生徒達の脚本選定委員会は、『人形館』と『ヌチドタカラ』の2本に絞り、6月20日、月曜日の生徒活動の時間に採決した。

『人形館』を男子の10人余りと女子の数人が支持したが、多数決で『ヌチドタカラ』に決まった。この間のいきさつを、私は学年通信『COSMOS』に次のように書いた。

『ヌチドタカラ』にチャレンジ

今週も実に色々なことがあり、忙しい一週間でした。(中略)

そして木曜日は9時近くまでの教官会議と続くのですが、“学校祭”の演劇コンクールの脚本がどうやら決まりました。担任の思いを立ててくれてか、生徒達の脚本委員からは三番煎じの『人形館』しか出てこず、担任推薦の『ヌチドタカラ……命こそ宝』に決定しました。

沖縄戦の実態をこの劇を通して、少しでも考えることが出来たらと思います。昨年の夏休み、沖縄大学主催の「平和セミナー」に参加させてもらいました。沖縄戦の中で、ひめゆりの塔を初めとして、“集団自決”が沖縄戦の苛酷さを示すものとし、あるいは半ば美談のように注目されてきました。集団自決のあったチビチリガマの真の暗闇の中で(回りにはまだ遺骨や遺品が沢山ありました)、私も1分間の黙禱を捧げました。しかしながら今、沖縄の人たちは全員が生還できたシムクガマの存在も評価しだしています。生きることを恥としてはいけない。命こそ宝だという気持ちと、“敵国人”への人間としての信頼(その裏には大和人よりもアメリカ人を信頼できるという沖縄の人々の目があったのでしょうが)。この二つは平和のための教育の原点ではないでしょうか。シムクガマにも行ってきましたが、当時の生還した人々が、長いガマでの生活から外に出てきたときの、太陽のまぶしさ、空の青さを

私も実感できたように思いました。『ヌチドタカラ』の最後の場面は、まさに生きて壕から出てくるわけで、そのことの重い意味を、演ずる生徒達にどう伝えられるか、見ている1年生や2年生にもどう伝えられるか、実にやりがいのある脚本だと思います。 (『COSMOS』 第12号, 6月25日)

この学年だよりには、私は主に親向けの文章を書いているが、生徒達が読むことはもちろん意識している。「生きて壕から出て来る」ことの「重い意味」を生徒にも考えてもらいたかったのだ。

この間、生徒達には次のような作業をやらせた。

- 6月20日 クラス全員での脚本の通読
- 22日 登場人物のキャラクター分析 アンケート方式
「シナリオを良く読んで各人物の年齢、体格、性格などを分析してみてください。」
- 25日 その結果、次のような性格付けのもとに、役者と裏方を含めた自薦の調査。
- ・生徒1 大きい? 演出家
 - ・生徒2 ひょうきん、明るい
 - ・生徒3 はっきりいう
 - ・生徒4 おっかながり、お上品
 - ・生徒5 (下級生) おとなしい、物知り
 - ・生徒6 ♪ 黒砂糖に興味がある
 - ・生徒7 ♪ 沖縄のことを良くつかんでいる
 - ・生徒8 ♪ 楽天的、甘党(?)
 - ・ノブ 高女の5年生16, 7才 打算的、はつみに批判的
 - ・はつみ ♪ 学徒動員に積極的、気が強い
 - ・とし子 ♪ やさしい、妹思い、勇気がある
 - ・八重子 ♪ 大和人、父は軍人
 - ・シマ とし子の次妹12, 3才 姉思い
 - ・チズ とし子の末妹8, 9才 甘えんぼう
 - ・兵 30才? 体格立派 がさつ、押しだしがきく
 - ・婦長 24, 5才?
 - ・負傷兵 (声のみ) 数名
 - ・少女A 15, 6才 富盛の野戦病院にいた、手榴弾を持っている
 - ・ ♪ B ♪ ♪
 - ・ ♪ C ♪ ♪
 - ・マイクの声
- 7月1日 道徳の時間にHR展示の話 演劇と結び付けて沖縄戦の展示もすることに決定。責任者に原田敦史。

4日 役割分担最終決定。

これから終業式までの2週間は、出演者は幕ごとの本読み(台詞の意味のチェックや書換え、そして台詞覚えへ)、裏方は2学期の計画の立案・打ち合せ、準備に入って行った。この前後の事を学年通信には次のように書いた。

「学校祭のこと」

1学期も残すは数日となってしまいました。この時期というのは、学級担任にとっては、“殺人的多忙の時期”です。もっとも、この時期に集中する仕事の内容はだいたい予測できるのですから、前もってやれることは、やっておけばすむのですが……。ところが、凡人の担任はそうは行きません。(中略)

さてA組のクラス演劇の事ですが、脚本は前にも書きましたように、『ヌチドタカラ』(命こそ宝)。配役の大半が女子で、男子は兵(小池君)の外は、声だけの負傷兵(田川、杉江、川崎、加藤君)、マイクの声(小倉君)。現在は、といっても練習を始めてからまだ一週間ほどですが、3回ばかり全員で通しの本読みしたあと、放課後に、各場面毎に、演出(萩下君)・演出助手(藤本さん、小池君、杉本さん、柴田さん)を中心に、本読みを毎日しております。さすが3年生という所で、練習態度は概ね良いのですが、男子が出番少なく、退屈してしまうのがいまいちと言うところです。

沖縄戦の背景を、少しでも的確に把握しておいてもらいたいということで、月曜1限の生活の時間には、6月の初めに、ニュースで取り上げられた“白旗の少女”の10分くらいのニュースのビデオを見ました。偶然か、中日新聞では昨日金曜の朝刊に、白旗の少女=比嘉富子さん(50才)がカメラマンのジョン・ヘンドリックソンさん(70才)に無事、会えたことを報じていました。10分という短かさもあってか、その時は、みんな実に真剣に見てくれました。

昨日の1限は、道徳ということで、『ああ、ひめゆりの塔』(日活、吉永小百合・浜田光夫主演)を見ました。最後は、手榴弾で自殺してしまい、『ヌチドタカラ』とは主題が違うのですが、『ヌチドタカラ』のプロローグはやはり、自爆の場面ですので、勉強にはなったのではないのでしょうか。“ハヤク、デテキナサーイ”という米軍の呼掛けもそっくりあり、マイクの声の小倉君も大いに参考となるでしょう。夏休み前は、シナリオの理解、細部の脚色・訂正・せりふの意味の理解を完全にして置き、夏休み最後の3日間の練習日あたりから、立ちげいこに入れば、と考えています。

“附属博”，中学生の発表のもう一つの柱は、クラス企画なのですが、こちらは原田君と鶴田君を責

任者として動きだしてはいますが、まだまだ全体が見えてこない、というところです。』(『COSMOS』第15号、7月16日)

この文中にもあるように、7月11日(月)1限の生徒活動の時間には、ニュース・ステーションから“白旗の少女”のビデオを、15日の1限の道徳の時間には映画「ああ、ひめゆりの塔」の一部を全員で見た。“白旗の少女”は生徒達に回し読みさせた太田昌秀著『沖縄戦とは何か』(久米書房)のカバーにもその写真が使われているし、月刊沖縄社刊の『沖縄戦の記録写真集』にも掲載されている。これは多くの生徒達が見ていた写真だけに、少女=比嘉富子さんが自分を撮ったカメラマンをアメリカまで行って捜しているというニュースは、生徒達の目を釘付けにした。

『ああ、ひめゆりの塔』は白黒で、録画状況も余り良くなかったが、女学生や兵隊の服装、濠の中のイメージなどを作り上げるうえで大いに役にたった。そして何よりも、沖縄戦が本土への防波堤になったこと、唯一の地上戦として多くの犠牲者(20万人と言われる)を出したこと、そういう沖縄戦を背景とした脚本に取り組む意義を感じることが出来たのではないかと思う。

3. 夏休みから上演まで

本校の3年生は、一応人並の成績を取ってれば、そのまま附属高校に進学できる。例年の実績から、余りに調査書の点が悪いと、本人の附属高校進学の希望があってもかなえられない場合があるということは生徒達も教えられている。従ってある程度以上の成績をおさめている生徒には、公立高校への受験などを考えない限りいわゆる“中だるみ”を起こす場合がみられる。そこで夏休み前の学年だよりには次のような文章を載せた。

「進路に向かって、有意義な夏休みを

(前略)人から言われるからというだけでなく、義務教育の最後の夏休み、“受験生の夏休み”を、みんなも多少は意識していることでしょう。来春の入試が、なんとなく頭から離れず、なにをやっても楽しくない。そういう夏休みが、中3や高3なら、必ず誰でもあるんだよ。言ってみれば、人生の関門というか、通過儀礼みたいなもので、そこを通過してみると、けっこう人間が一回り大きくなっている、というような“効果”もあるんじゃないかな。自分の目標達成のために、今のやりたいこと(欲望)を抑える、自分で自分をコントロールする、という大人になるための大事な資質が鍛えられて行くようにも思えます。

そういう意味でも、この夏休みは、みんなの人生にとって、大切な意味を持った夏休みだと思えます。附属高校以外の高校の受験を考えている人はも

ちろんのこと、附属高校への進学を考えている人たちも、「まあ、適当に勉強していりゃ、入れるだろう」などという安易な気持ちでは、折角の“受験”という試練から、何も学ばなかった、学べなかった、ということになってしまいます。

今までの夏休みは、「宿題をすましてしまえば、あとは天国」だったかも知れません。今年もおんなじでは、先は見えているというものです。自分の目標実現のためにどん欲になること。受験は、しょせんは点取り競争でもあるのだから、この夏休みは、不得意科目の克服に大いに利用しよう。不得意科目や不得意な分野を基礎からみっちりやり直してみる、教科書でじっくり復習する、問題集で応用力をつける。宿題を早くすましたあとは、自分でそういう計画を立てて、自分で点検して行くこと。そういうことが出来るようになったら、この夏休みを本当に有効に使えた、と言えるのではないかな。

もう一つ、みんなに望みたいことは、だからといって、“コチコチの受験生”にはなるな、ということ。クラス演劇や展示の企画には熱心であって欲しいし、小説を読んだりレコードを聞いたり時間は、夏休みには十分あまっているはず。40日の夏休みの一日一日を充実させて過ごして欲しいと願っています。(後略) (『COSMOS』第16号, 7月20日)

夏休み中の活動は終わりの一週間だけ。役者は夏休みの終わりまでには台詞覚えを完全にと言う約束であったが、この時期はまだ台本を手から離せる生徒はいなかった。休み中とあって、場面毎の立ち読みのけいこもなかなか全員が揃うことなく、演出の生徒が代役を勤めたりしての練習を重ねた。衣装係は布地を調達したり、大道具係は段ボール箱の収集、効果係は三線(さんしん)の音をどうするか考えあぐねる、という段階で、ようやく動き始めた、という所であった。

2学期に入って、始業前1時間の朝練、放課後1時間の練習が定例化した。その他月曜1時間目の生徒活動の時間、5、6時間目の学級活動の時間が、附属博演劇コンクールの10月5日までの1カ月間、フルに利用された。この頃の様子を、学年日よりでは次のように伝えている。

「中3A、このごろ

(前略) “付属博”でのクラス演劇“ヌチドタカラ”は、幕ごとの朝練・放課後の練習、立ちげいこに入っています。役者達のセリフ覚えはまだ60パーセントと言ったところで、シナリオを手放すとまだ危ないという役者は、来週の初めまでにはパーフェクトに覚えて欲しいものです。衣装はどうも自分達で作ってみようという姿勢が見られないのが寂しいところです。軍服などは貸し衣装にするのもやむを

得ないところかと思うのですが、良い知恵がありましたらお教え下さい。大道具の方は、まだ始まったばかりという所で、少しのんびりしすぎている様です。とし子の家と野戦病院の洞窟をどう作るかが肝心なのですが、そう簡単には出来ないよと、発破をかけているのに、なかなか動きだしません。

数回出てくる沖縄の三線の音は、「沖縄の民謡」というカセットがようやく手に入り、そこからダビングすることになっています。なにぶんイントロの部分だけを使おうというのですから、どうなりますか。昨夏、沖縄大学主催の沖縄平和セミナーに参加した際、歓迎の行事として、沖縄大学の職員を中心としたサークルが、ふんだんに民謡や三線を聞かせてくれました。それを録音してきておけば良かったのにと、今は悔やんでいます。効果の係は、目下、飛行機の爆音をどうするかが、懸案のようです。」(『COSMOS』第18号, 9月10日)

脚本『ヌチドタカラ』はプロローグと5場から成り立っている。そのうち三度、黒砂糖の出て来る場面があり、黒砂糖が一つの重要な伏線となっていると考えた。プロローグは、劇を演ずる生徒達の練習風景で、演出役の生徒1が持ってきた黒砂糖をめぐって次のような会話がある。北川汀氏の脚本は関西弁であるが生徒達がしゃべり易いように手直した。

生徒1「どうですか、みなさん、感想は？」

(中略)

生徒6「私、なんかこれ、沖縄の歴史の味がするよな気がします。」

生徒7「私も思ったんですけど。この黒砂糖、昔から伝えられてきた沖縄の心が分かるかも知れないって。」

生徒5「そうねえ。島津藩に治められた時代、沖縄のお百姓さんは自分からは一口も食べないで砂糖キビ畑作らされたそうだし……。戦時中、子供たちや学徒動員に送られた人が隠れて食べてたのも黒砂糖……。」

生徒3「うん、そう思ったら、あんまり気楽に食べられんねえ。黒砂糖は沖縄の歴史を見てた……。沖縄の人の心……。いや、沖縄の血や肉のかたまりとか……。」(以下略)

プロローグの位置づけについては削除も考えたが、沖縄と島津藩の関係、学徒動員のことなどを演ずる側にも見る側にも理解させるには重要な意味を持つ台詞が多い。このやり取りの直前に生徒1が持ってきた黒砂糖を「私のおばあちゃんの友だちが沖縄に住んで、ときどき送ってくれるの。純生の沖縄モンらしいよ。」と説明している台詞がある。「純生の沖縄モン」の黒砂糖をクラス全体で噛みしめて見ようということで、沖縄

の沖縄村に頼んでおいた黒砂糖が9月半ばに届いた。もちろん本番でも小道具として使ったが、「甘いだけだね……だけど、なつかしい甘さっていうのか……。」

(生徒3) という台詞の意味を全員で実感した。

黒砂糖は、とし子・シマ・チズの3姉妹が夜に逃げる場面(3場)と、はつみが洞窟に入ってきて再びチズと出会う場面(5場)に出て来る。いずれも乏しい食料として象徴的な意味を持っている。そういう意味でも「純生の沖縄モン」の黒砂糖を少しずつではあったが全員で味わったことは、クラスの劇作りへの雰囲気を高めて行ったように思う。

9月も後半となると、学校祭での上演まで2週間足らずとなった。4場最後の看護婦長の「あー中根さん！」と言う絶叫や、5場での2人の姉を失った状況を説明するチズの泣き声など、なかなか感情が移入できずテレが先行する。しかしながら役者の方はまだしも裏方の準備が遅々として進んでいなかった。このあたりの状況を学校祭直前の「学年だより」では次のように書いた。

「附属博まであと5日」

今日から10月。衣替えの期間ですが、まだ夏服派の方が多ようです。

先号にXデイのことを書きましたが、天皇が吐血されてからもう10日あまり経ちました。当初の報道ぶりでは、一週間は持つまい、というような感じを誰もが受けたと思います。ところが手厚い看護のおかげか、大相撲千秋楽やTVの連続ドラマを楽しんでおられるというニュースに接しますと、先ずは、よかったよかったというところですよ。ここ数日ようやく新聞などでも行事の“自粛ムード”への疑問も出されるようになりました。しかしながらこの一週間のTVや新聞の報道ぶりを見てみると、日本国民の天皇制への、のめり込み方は根深いなあ、と痛感させられました。それもマスコミが煽り立てているという感じですよ。個人の平等という点で、戦後の日本の民主主義は、やはり上すべりだと思えます。

先号を受けた話が長くなってしまいましたが、学校祭も“自粛”する高校が続出する中で、本校は“附属博”としていて良かったなー、などという冗談とも真面目とも取れる話が、過日、教官室で交わされていました。その附属博も5日から始まります。

我がクラスの演劇『ヌチドタカラ』の方は、大道具もまだ完成していない、衣装も揃っていないという中で、リハーサルが今日の午後行われます。役者のせりふ覚えのほうは、アガラなければ、まあ大丈夫というところですが、どうなりますことやら。戦時中の沖縄の若者達の苦悩や痛恨の思いを、幾分かでも、生徒達が共感して表現できれば、順位がど

うであろうと誉めてやろうと思います。

クラス展示の方も準備はいまいち、これから追込みと言うところですよ。美術の時間を中心としてグループ制作してきた作品(「草原の中の小さな家」とか「空き瓶利用のイカダ」など)と、劇との関係で沖縄戦に関する掲示物が中心になると思います。こちらの方はアイデアは出しますが、出来るだけ担任の手は出さないように気を付けています。どんな具合にし立てて行くか、興味を持って見守りたいと思います。』(『COSMOS』第21号、10月1日)

この10月1日午後の第1回のリハーサルはさんたんたるものであった。効果音が出来上がっていない、大道具も未完成だらけ、小道具は揃っていない。「これはヤバイ」と思ったが、どうにか本番には間に合ったようでした。

10月5日、上演当日。朝の集合が会場の体育館のためSTが出来ない。全員に最後の注意をしたかったが、以下のプリントを配布して注意に替えた。

「中3Aのみんなへ」

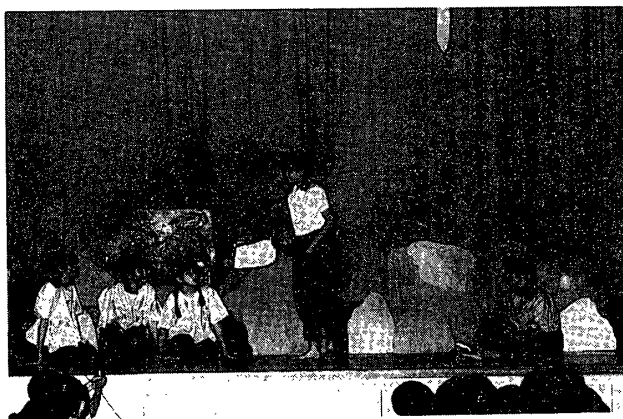
教室でのSTが出来ないから、この紙面で、担任からみんなにひとこと。

昨日のリハーサルでは、2幕で八重子の手紙の後、まだとし子とノブのせりふがあるのに幕を下ろさせてしまうという失敗があったけど(ゴメンネ)、土曜のリハーサルと比較してみると、見違えるような進歩があった。役者や裏方が頑張ったことはもちろんだけど、みんなが自分の与えられた責任を果たしたことが“進歩”につながったのだと思う。今日の本番も、昨日以上にみんなで協力して、さらに素晴らしい『ヌチドタカラ』に仕上げよう。中2の時のAB両クラスの劇も、1年生のときに比較すると、はるかに良いものだったと思う。しかし、中学最後の今年こそ、クラスの団結の成果として、DRAGONSよりひと足お先の“優勝”をめざしましょう。そのための注意事項を次に書いてみたいと思います。みんな、絶対に守って下さい。

- ①昨日配布した大道具関係と効果・照明関係の分担表を2枚、再び配布します。昨日のリハーサルを見ていて、少し変更した部分がありますから、注意して下さい。自分の分担を責任を持ってやりとげて下さい。全員がきっちりやってくれば絶対に優勝できます。今日は担任としては、みんなが自分の責任を果たせる人間であるかどうかを、見守っています。出来るだけ、手は出さないことにしますので自分達でやること。
- ②幕間の時間短縮がリハーサルをやってみての最大の課題でしょう。前幕の片付けを出来るだけ早くやり、その後、次幕の準備にかかること。これが

混線すると時間の無駄が多くなるよ。この辺は萩下の指示にみんなが従うこと。

- ③役者も裏方も、舞台のそでで、大声を出したり、ふざけたりしないこと。幕の後ろを通ったりしないこと。劇そのものをぶち壊すことになります。
- ④自分達の劇だけでなく、他のクラスの劇を見る態度も演劇の採点事項です。他のクラスもそれぞれに努力してきたのですから、笑ったり冷やかしたりはやめて下さい。劇を一生懸命作ってきた役者や裏方の立場になれば、決してそんなことは出来ないはずです。」



こうして6月からその取り組みを開始した演劇コンクールの幕もどうやら無事に降りた。生徒達が何を学んだか、そして担任の私が何を学んだかは、次章にまとめてみるとして、この演劇コンクールを通して私が生徒達に体験させたかったことは、演劇コンクール直後の「学年だより」の文章に尽きると思う。

「協力の大切さ・楽しさを忘れないように

附属博が、無事に終わりました。A組では、演劇コンクールの優秀賞とクラス展示の第1位の賞状が新たに付け加えられました。しかし、それらの賞状よりもはるかにまさる“みんなで協力することの大切さ”という賞状を、全員がもらったような気持ちがします。担任としては、その事の方が、はるかに嬉しく思います。

昨年夏、初めて沖縄を訪れたとき、ヌチドタカラという言葉にどこで接したのか、はっきりしません。その時、「命こそ宝」とは、良い言葉だな、と思いました。今年の脚本の選択の時期、もう一度、手持ちの脚本集を読み直してみて、前にはあまり気にも止めなかった『ヌチドタカラ』が、もう私の頭から離れなくなりました。生徒達は「暗過ぎる」ということで、最初、あまり乗り気ではなかったのに、担任権限(?)でゴリ押ししてしまいました。高校演劇部顧問の丸山先生が、この脚本で、附属博に演劇部の上演を考えているということを知り、「こり

ゃ、まずいな」「高校生が中学の演劇を見るわけではないから、まあ、いいか」などと、自問自答していました。すると、数日後、「どうも、演劇部の生徒達は、この脚本には乗って来ない」という丸山先生の言葉。「演劇部との競演は避けられた」と、ホッとしつつも、重い脚本を選んでしまったなあと思いました。

女の子たちは、この話が43年前のほぼ同世代の女の子の話であるためか、すぐにやる気を出してくれました。配役も女子の大半が出なくてはなりません。夏休みの最後の数日間の練習、そして2学期の始業式の翌日から始めた連日の朝練、そして放課後の練習にも、ほとんどサボる子もなく、例年に無く十分な練習が出来たと思います。大道具その他の裏方も良くやってくれました。

男子はどうだったでしょうか。男子のほとんどはなかなか燃えてきませんでした。男子の役者と言えば、小池君のやった兵にしても、小倉君のアメリカ人にしても、どちらかといえば“憎まれ役”。あとはせりふも少ない4人の負傷兵(川崎君、田川君、加藤君、杉江君)。これでは男子が乗り気になれないのも同情できました。それが分かるだけに、厳しく叱るのものはばかれましたが、その割には、演出の萩下君をはじめ、朝練にもしっかり出てきてくれました。この練習量だけは、どのクラスにも負けないと確信していました。

ところが、大道具、小道具、衣装、効果などの準備の状況は、かなり綿密な予定表を渡したはずなのに、1週間前になっても、心もとないものでした。なんと10月1日のリハーサルの際、舞台上は役者だけでしたし、効果音もなしでした。「これはヤバイぞ」と、全員が思ってくれたのか、それからが素晴らしかったと思います。とにかく、本番には細かいミスは、沢山ありましたが、場面転換では全員が一つになって動いていました。感動的な場面は、むしろ、幕の後ろにあったのです。役者も今までは(?)最高の演技だったと思います。「今年の中3は素晴らしい力を持っているなあ」、「中3の担任を希望して良かったなあ」と思いながら飲んだその夜のビールは最高でした。

自分のクラスのことだけを書いてしまいましたが、B組の「The Story of Imin」も素晴らしかったと思います。A組同様に(?)担任に押し付けられた難しい脚本に良く挑戦し、そして自分達のものにしていたと思います。去年も中3担任の鈴木先生には失礼かも知れませんが、少なくとも去年の中3の水準を遥かに越えていると思いました。高木先生が書かれているように、両クラスで最優秀賞を分け合いた

かったなというのが、率直な気持ちです。みんな、良くやった。合唱コンクールも力を合わせて、中3の実力を1, 2年生にも見せてやりましょう。」

(『COSMOS』第22号, 10月8日)

4. 生徒達にとっての『ヌチドタカラ』

演劇コンクールの一ヶ月後には合唱コンクールがあった。この二つの行事の終わった後、それぞれについてのアンケートをとったが、演劇コンクールについては次のような意見であった。

①脚本『ヌチドタカラ』について (複数回答)

- ・つまらない脚本だった 男3
- ・沖縄戦のことを考えさせられた 男12, 女17
- ・男子の登場人物をもっと多くするべきだった
男8, 女6
- ・戦後生まれの私達にはピンと来ない 男4, 女4
- ・場面転換が多すぎる 男3, 女2
- ・戦争中の若者の生き方を考えさせられた
男5, 女13
- ・沖縄の人々の大和人 (ヤマトンチュー) への恨み、
反感が分かった 男8, 女8
- ・話が暗すぎる 男5, 女2
- ・訴えが何なのか分からない なし

総数は男子が20名, 女子が22名。出演者が大半であった女子は全員が「沖縄戦のことを考えさせられた」「戦争中の若者の生き方を考えさせられた」「沖縄の人々の大和人 (ヤマトンチュー) への恨み, 反感が分かった」のどれかに○をつけていた。男子はこの3つの項目に○をつけた人数は女子に比べると少ないが, 3つの内1つも○をつけていないのは2人だけだった。

②印象に残った登場人物 (脚本の上で)。いくつでも良いが, () 内にその理由も。(省略)

③脚本の中で, 印象深い言葉があったら書いて下さい。その理由も。

- ・「デテキナサーイ, デテキナサーイ」(小倉がうまかったから) 多数
- ・「うちは生き抜くんだ」(涙が出るほど感激した, 最後の言葉ですごく感動した) 多数
- ・「ヌチドタカラ」(いい言葉ですね) 多数
- ・「後にもどれないんだったら, 前に出た方がいいかも知れない」(立派だなと思った) など。

④あなたはクラス演劇との関わりで, 次のどの意見に近いですか。1つに○をつけ理由も考えてみて下さい。

- ・自分の役割にベストを尽くせたから, 結果にも満足している。 男9, 女9
- ・自分の役割に, もう少し努力や工夫の余地があったと思う。 男9, 女11

・自分としては不満が多いから, あまり率直には喜べない。 男2, 女2

・別の脚本だったら, もっと自分の力を発揮できたように思う。 なし

「自分としては不満が多い」の男子の2名は裏方役にも余り熱心に取り組まなかった。そういう意味ではこの自己評価は適切である。反対に女子2名は主役のはつみととし子を演じた2人。「自分自身は一生懸命がんばったつもりだが思ったように演じることが出来ず結果もともなわなかった」「自分以外はかんべきだと思った」と反省の弁である。二人ともまだまだ自分自身に要求する部分があったのだろう。

⑤クラス演劇が終って, どんな印象が残っていますか。(複数回答)

- ・特に何もない。 男2, 女2
- ・沖縄へ行ってみたくなった。 男7, 女7
- ・沖縄の歴史に興味がわいてきた。 男4, 女2
- ・クラスのまとまりが出てきた。 男7, 女9
- ・練習や準備など, むだな時間がおおすぎる。
男3, 女1
- ・その他 男2 (「中学生としての思い出となった」
「気合いが入った」)
女4 (「とても楽しかった」「けっこう楽しめたし, いい思い出が出来た」
「ホッとした」など)

次に生徒達の作文をいくつか紹介しておきたい。「ぼくは兵士の役をやった。みんなよりはせりふが少ないけれど, 気合いを入れて, 大声をはりあげたりした。声をはりあげるの好きなのでおもしろかった。男は負傷兵とマイクの声と兵士だけであとは裏方だった。裏方のみんなもしっかりしがんばってくれたので, 最高のできだったと思う。」(小池)

「演劇では負傷兵の他に, 裏方の方では効果をやっていました。負傷兵役になるとは思っていなかったのは, はっきりいっていやだと思いました。効果では, 力を入れたつもりです。附属博直前まで, 難しい壁にぶつかり, 作業が一時中断していたのですが, しっかりできて良かったと思いました。その中で劇『ヌチドタカラ』が優秀賞に選ばれたのは, やはりクラスが1つになってやったことの, 1つの結果だと思いました。」(杉江)

「演劇で私が本気で取り組んだことは衣装です。もちろん役者の方でも一応がんばったつもりですけど……。衣装といっても戦争中に着る服なので適当につくったのですが……。ただとても残念に思ったことは, 一生懸命に服を工夫したのに, 全然目立たなかったことです。私みたいに無能力でも, やればできるなーとこの演劇を通して実感することが出来ました。」(飯田)

「演劇で初めて台本を見たときはすごく難しそうな話だなと思いました。でも話は戦争のことで好きでした。ただどまさかチズ役になるとは思っていませんでした。1年、2年の頃は大道具とか衣装とかしかかしていないのにいきなり難しい役になってしまってセリフが覚えれるかどうか心配でした。おまけに小さい子でねころんでいる。それに泣いているというところもあったから練習のときも苦労したし、あやとりをやっているところもあったのであやとりをしていてセリフがいえなくなったこともあります。でも苦労したかいがあって泣きまねもできるようになったし薬もぬって泣くこともできました（薬があれば誰でも泣けるね）。本番はうまくできたかわからないけど自分なりにできたかなと思います。」（小川）

5. 総合学習の立場から見ると

脚本の決定から上演までのプロセスに見られるように、今回のクラス演劇の取り組みはあまりに担任主導であったかな？とも考えられる。“はじめに”で触れたように、2年前の同じ3年生の『人形館』の時には、担任としては監視役にとどまった。もちろん稽古には終始つき合ったから、台詞の解釈や役者の性格分析などについても意見を出したが、演技指導については演出の生徒にほとんど任せていた。舞台装置も生徒達がほとんど自分達で考えた。初めてのクラス演劇の指導と言うことで自信がなかったことが最大の理由であったが、本論のテーマである総合学習の観点からみると、担任としては不満の残る脚本であった。

『人形館』は確かに人間同士の信頼、人間疎外などの問題を考えさせてくれる脚本ではあるが、台詞のひとつひとつの意味や状況の理解なしには脚本自体が理解できないと言うものではなかった。言い換えれば、あまりにも現実の生徒の問題意識にぴったりよりそい、地で演ずることが出来るのだ。だからこそ中1の時にみた今回の中3の生徒達もまっ先に出してきたのが『人形館』だった。演ずる役者も地で演ずることができ、しかも中1の生徒達にまで大きな感銘を与える。そういう意味では『人形館』は確かに素晴らしい脚本と言えるのであろうが、この脚本に取り組むことによって、新しい何かを学ぶ、得るといふ点ではいま一つ不満が残るのだ。

台詞の意味がまったく分からない。その言葉の重みが分からない。恥ずかしくてその台詞がどうしても言えない。そういう自分にとっての対立的な契機、違和感という様なものがむしろある方が、それを乗り越えることによって、演劇を通じて成長するという機会になるのではないか。

『ヌチドタカラ』は生徒達からみれば、ほぼ同世代

の女生徒の話とはいえ、40年も前の戦争中の話である。学徒・学徒動員・背のう・伝単・友軍・照明弾・手榴弾などなど初耳の言葉をいちいち理解しなくてはならない。5場の次の4つの台詞はこの脚本の一番アップールのある場所でもある。

少女A「うちたち島のもんは友軍がきて、うちたちの沖繩を守ってくれると喜んだ……その友軍が、兵隊が、沖繩の人間を殺すんだ！」

少女B「うちも見た……スパイだといって兵隊が島のもんを殺すんさあ……。思いだして涙をぬぐう）」

はつみ「うちたちは日本を守るため、命をかけて、何もかも投げ出して戦ってきたんだあ……。うちたちはお国のため、軍のためとって……。そのうちたちをなんのために……。」

少女C「同じ日本人といっても、大和人（やまとんちゅう）は大和人、島は島のもんが守るしかない……ということだな……。」

この台詞を、「戦争を知らない子どもたち」が、本土の防壁となり、友軍によってガマを追い出され、友軍によって泣く子の首を絞めさせられた沖繩の人達の無念をもって語れるか。平和セミナーで聞いてきた老婆の話を生徒達に聞かせたり、沖繩県立平和祈念資料館の『平和への証言』を読んだりした。

男子の出番は少なかった。負傷兵を4人に絞ってしまったが、効果音の操作（1人）、照明の係（2人）、演出と兵、アメリカ人以外は全員負傷兵として舞台上がらせた方がうめき声としてもすごみが出たと思われる。ガマの中での負傷兵達の様子については、これも前掲『平和への証言』中の日比野勝弘さんの文章が大いに参考になった。「おーい、学徒さんー、うじが、うじが傷について……はよう取ってくれ。」という台詞をかなり軽く言っていた負傷兵役の田川も、本番では真に迫っていた。2世か3世と考えられる、「マイクの声」は投降を迫る。当時はまさに、“売国奴”と考えられていたのであろうが、沖繩の人々を生の世界につなげた平和の声と今は考えられる。「ダレカイルカ、イルナラ、デテコイ、デテコイ、薬モ食料モアリマース、デテキナサーイ」という小倉の声は体育館の後からだんだんと舞台の方に近づいて行ったが、照明が当たらないと言うことも幸いしてか、実に落ちて着いていた。先のアンケートにも見られるように、生徒たちにも印象深かったようだ。

以上が『ヌチドタカラ』への取り組みを通して、沖繩戦の実像に少しでも近づこうとした総合学習の一面である。次に演劇そのものの総合学習性について考えて見たい。

東京都立南葛飾高校定時制での「演劇」教育の実践

について、竹内敏晴氏が『からだ・演劇・教育』（岩波新書、1989年4月）という本を書かれた。氏の著書については『ことばが劈かれるとき』（思想の科学社、1975年8月）以来注目しているが、今回の著書からも、中学生のクラス演劇を3年続けて指導してみても教えられることが多かった。演劇を生徒達の自己表現としてとらえる視点は、特に重要であろう。

「もし演劇およびその基礎訓練が少年および青年にとって意味があるとしたら、話しことばと身動きを含めて、全心身で自己表現することが、かれらの成長をいかに支え、促すか、ということを確認し目指し探ることが核心であろう。その過程で生徒の一人ひとりに起こってくる心理的なざくしゃくや突然の自己開示やを通じて、自分や相手の、そして役の人物の生きざまに気づくこと……それを『表現の教育』と概括するならば、それは生徒一人ひとりの独自の奥深い魂の底から動きだしてくるなにかが、教師との、そして仲間との交わりと共働の中で、どれほど受け止められ、勇気づけられるかにかかっている。

ならば、それが可能になるためには、まず教師にとっては一般的な演劇その他の技術の習得よりも、自身が創造の場に身において自らを動かし、変え、そして他者につき動かされることを体験してみることが第一に重要だろう。そしてその体験は、演劇とか、芸術とか、体育とかいう個別の科目の授業技術にまとめられるべきではなく、むしろ生徒のからだと話しかけを感じとれる教師自身の人間としての成長課題たるべきである。それによってこそ、全教科を通じてさまざまな試みもでき、そして教科の統合をも可能にしていくことができるだろう。」（注⑤）

演劇活動自体が話し言葉と身動きから成り立ち、総合的である。背景を考えそれを作り出さねばならない。木を切ったり釘を打ったり、色を塗ったりの技術が要求される。効果音を考えたり、『ヌチドタカラ』の爆音や波の音、機銃掃射の音など生徒達はシンセサイザーで作らだした。衣装の裁断から縫い上げまで、これにも技術がある。そういう意味では演劇はどんな脚本を選んででも総合学習たりうるのである。クラス演劇の場合、一人の生徒が役者だけでなく裏方の2役も3役もこなさなければならないという意味で、文字どおり「全心身の自己表現」にならざるを得ない。

しかしながら「全心身の自己表現」が「自分や相手の、そして役の人物の生きざまに気づくこと」にまわらなければ、「表現の教育」とは言えないのだ。

したがって他ならぬ教師自身が「生徒のからだと話しかけを感じとれる」課題を担っていると言うのである。こういう竹内敏晴氏の演劇教育論は、氏が「教科の統合」にまで言及しているからと言う理由だけでなく、生徒達の自己表現の場としての総合学習を考えてきた私たちにとっても多くの示唆を与えてくれる。

学校教育、特に中学校以後の教科主義の限界をいかに乗り越えるか。中等教育における教育理念の形骸化＝受験教育による競争主義原理をいかに乗り越えるか。これらの課題に対して、教科の枠を越えた総合学習の必要性、平和・人権・公害・性などの問題について多面的に考えることの出来る力を主張してきた。総合学習のグループでは、ひとまず目下は高3で「生命について」の授業を行っている。この実践の中で一貫して重視してきたことは、学習の自主性と発表能力、討論・話し合いであった。教師サイドの問題としては、チーム・ティーチングの重要性と、出来るだけ教科の専門性を越えて行くことであった。そして生徒と教師の関わりということ言えば、生徒を自分の担当の教科の目だけでみないと言うことであった。教師には、どうも自分の担当教科の成績のよい生徒はかわいい、自分の担当教科の成績の悪い生徒はかわいくないと考えてしまう性癖がある。そういう性癖から生徒を解放するためにも、教師は意識的に総合学習に取り組んで、一人ひとりの生徒を「全心身」として促えること、からだと話しかけの全体性において促えることへの努力を重ねる必要がある。

と書いて来ると、『ヌチドタカラ』リハーサル中に起こった男子生徒2名の喫煙事件に触れることなしに稿を閉じることはきれいごとの観を免れ難い。しかしながら最後にそういう問題の所在を示しただけでお許し願いたい。

- 注. ①鈴木計広『ペロ出しチョンマ』（日本演劇教育連盟編『中学校演劇脚本集4』、晩成書房）
 ②北川汀『ヌチドタカラ』（日本演劇教育連盟編『中学校演劇脚本集9』、晩成書房）
 ③チビチリガマの集団自決については、地元の読谷中学校の〈創作実話劇〉「チビチリガマの集団自決」（『南風の吹く日』所収、童心社）があることを脚本選定後に知った。
 ④沖縄県立平和祈念資料館ガイドブック『平和への証言』、P. 83～85
 ⑤竹内敏晴『からだ・演劇・教育』（岩波書店、P. 189～190）